

ハイファにとどまる

エミール・ハビービーのワタン (Waṭan / Homeland)

山本 薫

I. はじめに

現代アラブ文学を代表する小説家エミール・ハビービー (Imīl Ḥabībī, 1921~1996 年) は、1921 年、パレスチナ北部の港湾都市ハイファに生まれた。1948 年にユダヤ人によってイスラエルがパレスチナの地に建国された後も当地に留まったアラブ人のひとりであるハビービーは¹、1996 年に亡くなるまで、政治家として、ジャーナリストとして、作家として、イスラエル国内におけるアラブ人の権利擁護の闘いを続けた。晩年、癌に侵され死を予見したハビービーが記した遺書には、遺骸をハイファの墓地に葬り、墓碑には「ハイファに留まる (Bāqin fi Ḥayfā / Staying in Haifa)」と刻むよう書かれていた。死してなお、ハイファに留まることにこだわり続けたハビービー。この論文では、彼の生涯を振り返りつつ、ハイファに留まるということが、彼の文学に表された「ワタン (waṭan / homeland)」の観念とどう結びついていたのかを考察したい。

II. ハイファの作家、ハビービー

ハイファは古来、霊山として信奉されてきたカルメル山の山腹から地中海に向かって開けた、歴史豊かな町である。ユダヤ教、キリスト教、イスラームのいずれにおいても崇敬される預言者エリアが住まったとの伝承があるカルメル山中の洞穴は、現在でも三宗教共通の聖所とされ、12 世紀中頃から続く由緒あるカルメル会修道院が聖域の森を守

¹ イスラエルのアラブ系市民のアイデンティティは、イスラエルとアラブとパレスチナという国家的・民族的帰属意識、さらにはイスラーム、キリスト教、ドルーズなどの宗教的帰属意識の間で複雑に揺れ動く。「キリスト教徒のイスラエル人」のように、アラブ人としての民族意識を表に出さない人もいる一方で、アラブ人としてのアイデンティティや、難民や占領地の同胞たちとのつながりを意識する人々は「48 年アラブ」や「内側のアラブ」、あるいは「内側のパレスチナ人」といった呼称を用いる。ハビービーは自分たちを「イスラエル人」と呼ぶことはなく、イスラエルのユダヤ系市民との対比において「アラブ人」と称することが多いが、「パレスチナ人」、あるいは「パレスチナ・アラブ人 al-‘Arab al-Filasṭīniyyūn / al-Sha‘b al-‘Arabī al-Filasṭīnī」という呼称を用いることも多かった。以上を踏まえてこの論文では、ハビービーのようなイスラエルのアラブ系市民について、「パレスチナのアラブ人」という表現を主に用いる。

っている²。

オスマン帝国領となった16世紀初頭には寂れた小村と化していたハイファだったが、18～19世紀にかけて、貿易港として新たな発展を始めた³。その後、第一次世界大戦でオスマン帝国に勝利し、1920年からパレスチナを委任統治したイギリスは⁴、ハイファをパレスチナにおける戦略拠点と位置づけて鉄道と港湾の整備を進めると同時に、イラクからの石油パイプラインを敷設し、石油貯蔵タンクや精油所なども建設した。こうして都市化・工業化が急速に進む中、1922年に約2万4000人だったハイファの人口は1939年には10万人を超えたが、この時期ハイファの人口増の大きな要因となったのがユダヤ移民の急増だった。1910年代以降、ヨーロッパからのユダヤ移民がハイファで居住地域を拡大し、1939年にはイスラーム教徒とキリスト教徒から構成される地元のアラブ住民の数を凌ぐまでに膨れ上がった。その一方で、穀物価格の下落やシオニスト勢力による農地の大量取得などによって疲弊した農村部から、職を求めて都市ハイファへ流入するアラブ人口も増加し、ユダヤ人労働者との間の格差や軋轢が顕在化していくことになる⁵。

エミール・ハビービーの一家はイギリス委任統治時代が幕を明けて間もない1920年の冬、シャファールアムルという内陸の村からハイファに移住してきた。一家はキリスト教徒が多く暮らすワーディ・ニスナスという下町に最初の住居を借り、翌1921年8月にエミールが生まれた⁶。その後一家はすぐ近くの高台にあるアッバース通りに家を構え、この通りと交差するバハーイー教の聖廟を擁した美しい庭園は、エミール少年の遊びと夢想の場となった。ハイファのコスモポリタンな都市空間と、それを包み込む緑豊

² Francis Gigot, "Mount Carmel", *The Catholic Encyclopedia*. New York: Robert Appleton Company, 1908. <http://www.newadvent.org/cathen/03352a.htm> (Accessed 25 August 2018).

³ Mahmoud Yazbak, *Haifa in the late Ottoman period, 1864-1914: a Muslim Town in Transition*. Leiden: Brill, 1998.

⁴ イギリスのパレスチナ委任統治は実質的に1920年7月に始まり、1922年7月に国際連盟理事會から正式承認された(奈良本英佑『パレスチナの歴史』明石書店、2005年、76頁)。

⁵ May Seikaly, *Haifa: Transformation of a Palestinian Arab Society 1918-1939*, London/New York: I.B.Tauris.

⁶ ハビービーの一家は聖公会所属のキリスト教徒だった。19世紀以降中東での布教を開始した聖公会の信徒は極めて少数派だったが、ハナーン・アシュラーウィ、エドワード・サイドなど、パレスチナ社会を牽引する傑出した人材を輩出した(リア・アブ・エル＝アサール『アラブ人でもなくイスラエル人でもなく：平和の架け橋となったパレスチナ人牧師』興石勇訳、聖公会出版、2004年)。

かなカルメル山と海という、少年期の思い出の世界をハビービーは終生愛し、のちに痛切なノスタルジーと共に作品に刻み込むことになる。

高校卒業後、ハイファの精油所で働きはじめたハビービーは若くしてパレスチナの共産主義運動の中心的な活動家となる。1947年11月に国連総会でパレスチナをアラブ人国家とユダヤ人国家とに分割する決議案が採択されると、地元のアラブ住民および周辺アラブ諸国の大勢が分割案を拒否する中で、ハビービーらパレスチナの共産主義者たちは分割を受け入れる決断をする。しかし現実には、パレスチナの地に誕生したのはユダヤ人が建国したイスラエルだけであり、パレスチナのアラブ人たちを待ち受けていたのは故国喪失（ナクバ）の悲劇であった。さらに皮肉なことにその過程で、ハビービー自身が一時期「難民」になってしまう。

当時、ラーマッラーで暮らしていたハビービーが、いったんヨルダンに逃れ、そこからレバノンに移り、二か月後に国境を越えて新生イスラエル国家に「密入国」していたという事実は、最晩年に撮られたドキュメンタリー映画の中で初めて本人の口から語られた⁷。ハビービーのようにイスラエル建国後も国内に留まったアラブ人の一部には、いったん難民になった後、国境を密かに越えて帰還した「潜入民 (mutasallil)」と呼ばれた人々があり、見つかって追放される場合もあれば、何らかの手段を講じてイスラエルの市民権を得られる場合もあった。後にパレスチナを代表する詩人となったマフムード・ダルウィーシュ (Maḥmūd Darwish, 1941~2008年) も、潜入後にイスラエル市民権を得た一人であったことが知られている⁸。代表作『悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事 *al-Waqā'ī' al-Ghariba fi Ikhtifā' Sa'īd Abī al-Naḥs al-Mutashā'il*』の主人公サイドはじめ、ハビービーの作品にはこうした「密入国」という不条理な形で帰還を果たしたアラブ人たちがしばしば登場するのだが、実はハビービー自身が元潜入民だったというのである。

同じ時期に兄弟の大半がヨルダンやシリアに逃れて難民となるなかで、ハビービーは危険を冒してまで愛する故郷の町ハイファに戻った。この時、「ハイファの作家」ハビービーが真に誕生したと言えるだろう。ユダヤ人武装勢力によってハイファが制圧された1948年4月当時、ハイファに居住していたアラブ人、およそ6万2000人のうち、イス

⁷ Dalia Karpel, *Emile Habibi: I Stayed in Haifa* (film), 1996.

⁸ エリアス・サンバー『パレスチナ 動乱の100年』福田ゆき・後藤淳一訳、創元社、2002年、155~158頁。

ラエル建国後も留まれたのはわずか 3566 人。多くの家屋や店舗は破壊あるいは没収され、ハイファのアラブ人コミュニティーは壊滅的な打撃を受けた。イスラエル建国後にユダヤ移民が大量流入した一方で、現在、ハイファ市人口のおよそ一割を占めるアラブ系市民の多くも、1970 年代以降、ガリラヤ地方の村落部から移り住んできた人々とその家族である⁹。住民は入れ替わり、アラビア語だった通りの名前はヘブライ語に改変され、生まれ育ったハイファの町が別のハイファになっていく。ハビービーはそうした故郷の変化を見つめ続けた。彼の作品はほぼ全てがハイファを舞台としており、ハイファに「留まる」こと、そしてハイファの記憶を作品の中に「留める」ことこそが、彼の生涯と文学のテーマであったといえるだろう¹⁰。

III. ワタンの記憶とナショナル・アイデンティティの覚醒

イスラエル建国によって 70 万人ともいわれるアラブ人がパレスチナの地から追われて難民となった一方で、約 15 万人が新たにイスラエル領となった地に様々な経緯で留まり、その後イスラエル市民権を与えられたという事実は、一般にはあまり知られていない。現在、イスラエル人口のおよそ二割を占めるとされるアラブ系市民は、1966 年まで軍政下に置かれて居住や移動を制限され、軍政撤廃後も様々な差別や格差に苦しめられてきた¹¹。

ハビービーはそうした自分たち、イスラエル国内のアラブ人のことを「ハーズークのてっぺんにしか自分のワタンの中に居場所を見つけられなかったわが民」¹²と記してい

⁹ Yossi Ben-Artzi “Normalization under Conflict? Spatial and Demographic Changes of Arabs in Haifa, 1948-92”, *Middle Eastern Studies* 32-4 (1996), p.283; pp.292-295.

¹⁰ 自宅は 1956 年にナザレに移したが、ハビービーの政治活動と文学活動の拠点はハイファだった。彼が所属した共産党の事務所は生まれ育ったワーディ・ニスナーズ界隈にあり、1991 年に離党した後もそのすぐ近くに事務所を構えて、自ら創刊した文芸誌『マシャーフ (高台) *Mashārif*』の発行に精力を傾けた。なお、ハイファの町の歴史とハビービーの生涯および作品との関わりについては拙稿「ハイファの作家、エミール・ハビービー：都市の記憶としての文学」『日本中東学会年俵』23-2 (2007 年)、171~191 頁により詳しい。

¹¹ サブリ・ジュリス『イスラエルの中のアラブ人』若一光司・奈良本英佑訳、サイマル出版会、1975 年；田浪亜央江『〈不在者〉たちのイスラエル：占領文化とパレスチナ』インパクト出版会、2008 年；Ilan Pappé, *The Forgotten Palestinians: A History of the Palestinians in Israel*, Yale University Press, 2013 などを参照のこと。

¹² Imil Ḥabībī, *Sirāj al-Ghūla: al-Naṣṣ wa-l-Waṣīyya*, Ḥayfā: Dār ‘Arabisk li-l-Nashr. 2006, p.18.

る。ハーブークとは、中世に拷問や処刑に用いられた杭状の刑具のことであり、イスラエルになってしまった故郷の中で二級市民として生きる不条理とその痛みを表している。それでもなお、「亡命地の広大さすべてを合わせたよりも、ワタンの土の上に立つハーブークのてっぺんをわれわれは選ぶ」¹³と語るハビービーにとって、ハイファに留まり、ハイファの記憶を作品に留め続けることは、ワタンとしてのパレスチナの記憶を守り、次世代へとつなげることと同義であった。

「ユダヤ人国家」を標榜するイスラエルは、領域内からアラブ人を追放し、その土地や財産を没収するだけでなく、彼らの歴史的痕跡そのものを抹消することで、地理的にも人口学的にも歴史的にも、パレスチナをユダヤ化する政策を推し進めた。それに対しハビービーらイスラエル国内の共産主義者たちは、アラブ系市民の権利を擁護する活動を通じて、イデオロギーを超えた支持を獲得していった¹⁴。だが、そうした政治活動だけではパレスチナの地におけるアラブ人の存在と、彼らが育んできた歴史文化の豊かな価値を証明することはできないと考えたハビービーは、文学活動にも本格的に取り組むことになる¹⁵。特に、1970年代初頭に閣僚の一人だったイガル・アロンが「居残ったパレスチナ人は『存在』していない。存在しているのであれば、ユダヤ国家が建設された後パレスチナの地で生まれたヘブライ語文学のように、彼らを表現する文学があるはずだ」と発言したことは、文学の役割をハビービーに強く意識させたという¹⁶。

¹³ Ibid., p.18.

¹⁴ ハビービーはイスラエル建国後、ユダヤ人党员とアラブ人党员が合流して結成されたイスラエル共産党（通称マキ）に加わった。イスラエル共産党はイスラエルの政党の中で唯一、ユダヤ人とアラブ人との共存を唱えた政党であったが、シオニズムやソ連の反イスラエル政策への評価をめぐって内部対立が起き、1965年にアラブ人党员の多くは新たにラカハ共産党を結成し、アラブ系市民の間で高い支持を集めた（白杵陽『イスラエル』岩波書店、2009年、151～152頁）。ハビービーは1951年から72年にかけて、当初はマキ、分裂後はラカハからイスラエル国会議員に選出され、その後1989年まで党発行のアラビア語日刊紙『イッティハード（団結）*al-Ittihad*』の編集長も務めた。

¹⁵ 政治家・ジャーナリストとしての活動の傍らいくつかの短編を発表していたハビービーは、1968年の『六日間の六部作 *Sudāsiyyat al-Ayyām al-Sitta*』によってその名を広く知られるようになり、1974年の『悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事 *al-Waqā'i' al-Ghariba fī Ikhtifā' Sa'īd Abī al-Naḥs al-Mutashā'il*』（以下、『悲楽観屋』）の成功で作家としての揺ぎ無い地位を確立した。その後も『ルカウ・ブン・ルカウ *Luka'bn Luka*』（1980年）、『イフタイエ *Ikhtayy*』（'85年）、『ゲールの娘サラヤー *Sarāyā Bint al-Ghū*』（1991年）と、時代の節目節目に長編作品を発表し続けた。

¹⁶ Māhir al-Sharīf, "Imīl Ḥabībī wa-Mu'ānāt al-Muthaqqaf al-Siyāsī", *Mashārif* 16 (1997): 66; Ṣabīrī

イスラエル建国後、ハビービーが最初に発表した「マンデルバウム門 *Bawwābat Mandilbāwm*」(1954年)は、彼と共にハイファに留まった高齢の母親が、難民になって離れ離れになってしまったほかの子どもたちや孫たちに死ぬ前に再会したいと願い、ひとたび越えれば二度とは戻ってこられない停戦ラインを越えてヨルダン側に出ていくのを見送った経験を描いた短編である。その中でハビービーは、自発的な難民となって出ていこうとする母親を見送りながら、ワタンとは家であり、代々受け継がれた家財であり、近所の物売りの呼び声であり、家族の思い出であって、亡命先へ運んでいくことはできないものだ、と記している¹⁷。

このようにハビービーにとってワタンは常に記憶と結びついており、彼の作品には、ワタンに留まりその記憶を守り続ける象徴的な女性が重要なモチーフとしてしばしば登場する。中でも印象的な一人が、1969年発表の『六日間の六部作 *Sudāsiyyat al-Ayyām al-Sitta*』の第三話「ウム・ロバビキヤ *Umm al-Rūbābikiyā*」の女性主人公である¹⁸。六つの短編から成るこの連作小説は、1967年の第三次中東戦争でヨルダン川西岸地区とガザ地区までもがイスラエルに占領されたことによって、建国以来ほとんど周辺のアラブ地域と接触できなかったイスラエル国内のアラブ人たちが、難民となった親族や友人たちとおよそ二十年ぶりに再会を果たすというきわめて皮肉な状況を、悲劇を喜劇に転じるような独特の強靱なユーモアによって描いた作品である。夫が子どもを連れてイスラエル国外へ脱出することを選んだ後もひとりハイファに留まった女性主人公は、難民となってしまった同胞たちが後に残していった古道具を買いあさっては、そこに仕舞い込まれていた恋人たちの手紙や若き日々の思いを綴った日記を集め、宝物にしていたために、「ウム・ロバビキヤ=古道具かあさん」と呼ばれるようになった。敗戦後、イスラエル領内への一時訪問が許された難民たちが、亡霊のようにハイファのかつての自宅を探してさまよう姿を見た彼女は、自分は難民たちの思い出の宝物をずっと大事に守りながら彼らの帰還を待ち続けてきたのに、なぜ彼らは訪ねてきてくれないのかと語り手に問いかける。

さらにハビービーの作品には、ただ同胞たちの帰還を待つのではなく、彼らに帰還を

Ḥāfiz, “Imil Ḥābibī: Ibdā’ al-Huwiyya al-Waṭaniyya wa-lḥyā’ al-Dhākira al-Filastīniyya” *Mashārif* 16(1997), p.44.

¹⁷ Imil Ḥābibī, “Bawwābat Mandilbāwm”, in *Sudāsiyyat al-Ayyām al-Sitta wa Qīṣaṣ Ukhrā*, Ḥayfā: Dār ‘Arabisk li-l-Nashr. 2006, pp.98-99.

¹⁸ Imil Ḥābibī, *Sudāsiyyat al-Ayyām al-Sitta wa Qīṣaṣ Ukhrā*, Ḥayfā: Dār ‘Arabisk li-l-Nashr. 2006.

呼びかける女性も登場する。その際の「帰還」とは、「ウンム・ロバビキヤ」に描かれていたように、単にかつての自宅を探し訪ねるのではなく、ワタンの記憶のありかになどどり着き、それとの絆を取り戻すことを意味する。そして、ハビービーの多くの作品において、ワタンの記憶を呼び覚ませと言う呼びかけは、パレスチナの地を離れざるを得なかった難民たちよりもむしろ、パレスチナのアラブ人としてのルーツや民族的帰属意識を封印することによって、イスラエル国内でなんとか生き延びようとしてきた、自分を含めたイスラエル国内の同胞たちに向けられている。1985年の『イフタイエ *Ikhtayyi*』¹⁹は、まさしくそうした作品である。

この小説では、イスラエル建国前の少年時代、イフタイエという少女に恋をしていたハイファ出身の難民男性が、のちにアメリカ国籍を取得して一時帰還を果たしたハイファの路上で、その少女の幻影に遭遇するという事件の謎が語られる。その男性は誰で、その少女とどんな関係にあったのかといった謎を追ううちに、語り手自身もまた、かつて少年時代にイフタイエに恋していたことを記憶の奥底からすくい上げる。いや、自分だけでなく町の少年たちみなもイフタイエに恋をし、その後、彼女のことを記憶から消し去って生きてきた事実を思い出すのである。一方、イフタイエはハイファの片隅にひっそりと暮らしながら、その後も彼らにあてた手紙を書き続けていた。この謎と象徴に満ちた作品において、パレスチナ方言で「過ち」を意味するイフタイエという名で呼ばれていた少女はパレスチナそのものであり、彼女が犯したとされる「過ち」とは、望まれぬアラブ人国家を産もうとしたことであった。

当時のパレスチナで最も発展した都市のひとつとして、アラブ人国家建設の可能性も秘めていたハイファのアラブ人社会が、イスラエル建国によって崩壊させられていく悲劇的な過程を目の当たりにしていたハビービーは、この作品の中でかつての町とその住民の姿を記憶の淵から呼び起こし、アラブ都市としてのハイファの記憶を消し去ろうとする流れに抗う。またそれと同時に、ワタンへの初恋の記憶を封印したすべての人たちに、その記憶を蘇らせるよう呼びかける。それは、パレスチナのアラブ人としてのナショナル・アイデンティティの自覚と覚醒への呼びかけでもあった。

IV. 開かれた未来のワタンに向けて

¹⁹ Imil Ḥabībī, *Ikhtayyi*, Ḥayfā: Dār ‘Arabisk li-l-Nashr, 2006.

イスラエルのシオニズム体制を批判し続けたハビービーは晩年、イスラエルとの和平こそ唯一の現実的解決策であるとしてオスロ合意を強く支持し、アラブ人とユダヤ人との共生を訴えた。こうした政治姿勢に戸惑い、変節したと批判する者も少なくなく、特に 1992 年にイスラエル国家が授与する最高の文化賞とされるイスラエル賞を国内のアラビア語作家として初めて受賞した際には、アラブ諸国の作家や知識人らが辞退を呼びかける声明を出すなど、大きな批判を浴びた²⁰。しかし、1947 年の国連パレスチナ分割決議を受け入れて以来、イスラエル国家の存在を認めたいうえで二つの民族の平等と共生を求めるといふ点において、ハビービーの立場は一貫していた²¹。1994 年 1 月に筆者が行ったインタビューでも、オスロ合意を支持した理由について、ハビービーは以下のように明確に答えていた。「われわれパレスチナの共産主義者は当初から、イスラエルの存在は、そのあらゆる犯罪行為にもかかわらず、取り消せないと考えてきた。われわれは民族主義が他の民族の抹殺に走るような時代に生きているのではない。マムルークが十字軍を撃滅した時代、またアンダルスでアラブ人が抹殺された時代に生きているわけではない（……）われわれは民族の抹殺ではなく、民族解放の時代に生きているのだ。われわれは理性的に、イスラエルは存続するのであり、仮にイスラエルの抹殺がわれわれの義務であるとしても、それは不可能であると考えてきた」²²。

ハビービーがユダヤ人との共生を真剣に考えるひとつの大きなきっかけになったのは、1983 年にさかのぼるユダヤ人文学者たちとの交流だった²³。その後、旧ソ連のベレストロイカを支持したことから共産党指導部と対立し、1991 年には離党に至ったハビービー

²⁰ こうした批判に対しハビービーは、後のテレビインタビューで、この賞を受け入れた理由を次のように語っている。「イスラエル国内のわれわれの民は、自分たちの存在、民族性、パレスチナ性、伝統、文学に対するイスラエルによる承認を必要としている。同様に、われわれが祖国に留まったことは正当な権利であるとのアラブ諸国による承認を必要としている。私はこの賞を受け取ることで、イスラエルからもアラブ諸国からも、[イスラエル] 国内にわれわれが存在することの正当性を引き出そうと思ったのだ」<https://www.youtube.com/watch?v=fVIRbL4RV2E> (Accessed 25 August 2018)。

²¹ al-Sharīf, “Imīl Ḥabībī wa-Mu‘ānāt al-Muthaqqaf al-Siyāsī”, p.63.

²² 1994 年 1 月、ナザレにて会見した際の山本によるインタビューより。

²³ 1983 年にハビービーは「占領に反対し平和と表現の自由を求めるイスラエル・パレスチナ合同芸術家委員会」をユダヤ人作家のヨラム・カニユク (Yoram Kaniuk) と共に創設した。この頃までハビービーは共産主義のイデオロギーに捉われて、共産党員以外のユダヤ人との交流ができず、いと述べ、「シオニスト」「反共」とレッテルを貼ってきたユダヤ人たちとの共生こそが課題なのだと述懐している (*Sirāj al-Ghūla*, p.65)。

は、彼が「世俗的原理主義」²⁴と呼ぶようになった共産主義のイデオロギーから距離を置き、個人の自由な思想や寛容さに立脚しつつ、「二つの民族が一つのワタンの中で共生できる方法を探す互いの必要性」²⁵をより強く意識するようになる。1995年のラビン首相暗殺と、その後のイスラエル政界における右派の台頭によって、歴史的な両民族の和解の機会として彼が大きな期待を寄せていたオスロ合意は頓挫する。それでも1996年に亡くなる直前に書かれたエッセイ『魔物のランプ *Sirāj al-Ghūla*』には、二つの民族間の平等の実現と交流の先に、和解と共生の未来が開ける可能性が示唆されている²⁶。

イスラエル支配下で抹消されつつあるパレスチナの記憶を留めようとしてきたハビービーにとって、二つの民族が共生できる「ワタン」とはどんなイメージだったのだろうか。これについてヒントを与えてくれるものとして、初期の短編「ジプシーの少女 *al-Nawariyya*」(1963年)を見てみよう。

アラブ人が多く住むハイファの下町ワーディ・ニスナースに、三十年ぶりにジプシーの少女が昔のままの姿で戻ってきて、商店街の年寄りたちに若い頃のなつかしい記憶を呼び覚ます。子どもたちも興味津々で集まってくる。何が起きているのか理解できず、不審そうに見ている「プラスチック売り」は新たに町に住み着いたユダヤ人、警戒する「市の憲兵」もユダヤ人であろう。年寄りたちが饒舌に昔の思い出を語り始める中で、いつもは政治的な話題からは距離を置く床屋が話しかける。「君はジプシーだ。この国は君のワタンじゃない。どうして不在者たち [= 難民たち] を差し置いて、君が帰ってこられたんだ？」²⁷

するとナワリーヤは答える。「賢明な床屋さん、あなたにワタンは残っているの？あなたたちのこの国では何を切っているの？人の髪の毛、それとも彼らのルーツ？ ファラーフェル [東アラブで軽食として広く食べられる豆コロッケ] はあなたたちよりずっとしっかりしたルーツを持ってるわ。トルコ人の統治も、イギリスの統治も葬って、自分はそのあとも生き残ったのよ」²⁸

その後、憲兵に散会させられた子どもたちは、みんなでファラーフェルを食べに行く。

²⁴ Imil Ḥabībī, *Sarāyā Bint al-Ghūl*, Ḥayfā:Dār ‘Arabisk li-l-Nashr, 2006, p.11.

²⁵ *Sirāj al-Ghūla*, p.66.

²⁶ Imil Ḥabībī, *Sirāj al-Ghūla: al-Naṣṣ wa-l-Waṣīyya*, Ḥayfā:Dār ‘Arabisk li-l-Nashr, 2006.

²⁷ Imil Ḥabībī, “al-Nawariyya”, in *Sudāsiyyat al-Ayyām al-Sitta wa Qīṣaṣ Ukhrā*, Ḥayfā:Dār ‘Arabisk li-l-Nashr, 2006, p.123.

²⁸ *Ibid.*, p.124.

それは「今風の [=イスラエル風の]」ファラーフェルだが、「ファラーフェルはファラーフェルのままで」²⁹と語り手は言う。二度と自分たちのもとを去らないでくれ、と言われたナワリーヤは答える、「私はあなた方のもとを決して去らなかった」³⁰。そして、一人一人が自分のことを思い出し、その子どもたちにも自分のことを思い出させたならば、「その時私は戻ってきて、踊るでしょう。手と手をからませて、このワーディの外で、広い空間で、プラスチック容器売りの子どもたちとも、市の憲兵の子どもたちとも一緒に」³¹。

この作品の興味深い点は、ワタンの記憶を想起させる存在である少女が、ジプシーであるとされているところにある。ここには、イスラエル建国によって国家への帰属と国境線による分断を強いられる以前の、パレスチナにおける緩やかな土地と住民との結びつきがイメージされているように思われる³²。そして「ファラーフェルはファラーフェルのまま」という表現には、統治者が変わるたびに新たな要素や変化を受け入れながらも、土地に根差した生活文化を保持してきたレジリエンス（弾力性）こそがパレスチナの特徴であり、いつしかイスラエルのユダヤ人社会も、パレスチナの重層的な歴史の一部になり得るというハビービーの歴史観が表明されていると思われるのである。

さらにハビービーは最後の小説作品となった『グールの娘サラヤー *Sarāyā Bint al-Ghūl*』(1991年)において、愛する故郷の町ハイファの化身であり、彼の文学のミュージックでもあるサラヤーを、ジプシーのような少女だと描写している³³。ハイファの町を見下ろすカルメル山の自然の中で暮らすサラヤーは、イスラエル建国後に「密入国」によってパレスチナに帰還しようとした難民たちの手引きをしていたが、自身は国家に帰

²⁹ Ibid., p.124.

³⁰ Ibid., p.125.

³¹ Ibid., p.125.

³² パレスチナ映画を代表するミシェル・クレイフィ (Michel Khleifi) 監督の『三つの宝石の物語 *Hikāyat al-Jawāhir al-Thalāth / Tale of the Three Jewels*』(1994)でも、主人公の少年が恋をする少女はジプシーという設定になっており、血統主義や宗派主義に基づく排他的なナショナリズムとは無縁の、「雑種の」なパレスチナのイメージがこのジプシーの少女という登場人物に投影されている。

³³ 短編『ジプシーの少女』から約三十年後に書かれた『グールの娘サラヤー』では、サラヤーはジプシーであるとはっきり描写されることはなく、彼女を見た者たちが「ジプシーのような」と形容するにとどまっている。多様な要素に開かれたワタンを想起させる、ジプシー的なキャラクターのイメージをこの間にハビービーが深化させ、特定の帰属を示す表現を避けることを意図するようになったのではないかと推測する。

属しない存在であり続けた。しかし、イスラエルがカルメル山にも近代的な土地管理の概念を適用するようになると、彼女は住处を失ってしまう。そうして囚われの身となったサラヤーとは、近代的な国家の枠組みに押し込められることで、自由な移動と多様な要素の受容を否定された、本来そうあるべきだとハビービーが想像するところのワタンの姿を示しているのではないだろうか。

V. おわりに

ハビービーが墓碑に刻むよう遺言した「ハイファに留まる (Bāqin fi Ḥayfā / Staying in Haifa)」という言葉は、パレスチナ難民作家ガッサーン・カナファーニー (Ghassān Kanafānī, 1936~72年) のよく知られた小説のタイトル『ハイファに戻って *ʿAidun ilā Ḥayfā / Returning to Haifa*』³⁴を思い起こさせる。実際にハビービーがカナファーニーを意識していたのかどうか明らかではないが、両者を対比させてみることは、ハビービーのワタン観を窺う一助になるように思う。

1970年に発表された『ハイファに戻って』は、イスラエル建国時にハイファを追われ、難民としてヨルダン川西岸地区に暮らしていた主人公サイドが、1967年の敗戦後、ハイファへの一時訪問を許された時の出来事を描いている。つまりこの作品は、先に論じたハビービーの「ウム・ロバビキヤ」と同じ設定を、逆の立場から描いているのである。このハイファ訪問時にサイドは、「ウム・ロバビキヤ」を訪ねなかった。言い換えれば、サイドはもはやハイファの町にも昔の自宅にも、ワタンを見出すことができなかった。そこは今やイスラエルに支配された場所でしかなく、難民になった時に生き別れてしまった自分の息子がユダヤ人に育てられ、シオニストの兵士になっていたという展開は、まさしくそうした断絶を象徴している。カナファーニーにとってワタンとは、戦って取り戻したパレスチナの地に新たに一から作り直さねばならないもので、そのための「帰還」のプロセスに自己を投じ続けることこそがパレスチナ人として生きることだった。

一方、ハビービーにとってのワタンは、パレスチナの土地に深く根を下ろした歴史的な存在であり、イスラエル国家がいかにそれを否定・抹消しようと試みようとも、パレスチナのアラブ人としてのアイデンティティを保持し、ワタンの記憶をこのパレスチナ

³⁴ガッサーン・カナファーニー「ハイファに戻って」奴田原睦明訳、『太陽の男たち・ハイファに戻って』収録、河出書房新社、1978年。

の地で守り続けるのだという決意と矜持が「ハイファに留まる」という言葉には込められていた。パレスチナにおける抵抗運動の二つの側面である「ムカーワマ (Muqāwama / Resistance)」とスムード (Ṣumūd / Steadfastness) のうち、後者の理念を体現した言葉であるといえる。

古代から今に至るまで様々な民族、様々な文明の遺産が地層のように積み重なったパレスチナの歴史文化に深い造詣と敬意を抱いていたハビービーは、粘り強くスムードを続ける先に、シオニズム国家による支配という一時期を乗り越えて、パレスチナに残り続けたアラブ人も、帰還した難民も、そしてアラブ人と共生する用意のあるユダヤ人も（あるいはそれ以外の人々も）共に生きることが出来る場として、再びパレスチナがそのあるべき姿を取り戻すことへの希望と信頼を作品の中で示し続けた³⁵。これは、「私はギリシア、ローマ、ペルシア、ユダヤ、オスマン朝といった、[パレスチナの] 土地を通り過ぎていったあらゆる文化の息子だ(……)私はこれらの父たちすべての息子だが、一人の母に属している」と語り、ムスリムとユダヤとキリスト教徒がかつて共存していた失われた楽園としてのアンダルスの再来を希求した、詩人マフムード・ダルウィーシュのビジョンとも重なる³⁶。晩年に近づくにつれて、ハビービーの作品からは喪失感やノスタルジーがより強く感じられるようになっていったが、それでも彼が代表作『悲楽観屋』(1974年)で描いた、悲劇を喜劇に転じようとする悲楽観主義者 (mutashā'il / pes-soptimist) の精神は、最後まで失われなかったように思う。

³⁵ たとえば『悲楽観屋』第二の書の最終節における、拙速な武装闘争へと突き進む若い世代の置かれた状況や心情を理解しながらも、粘り強く生きながらえ、解放の機が熟すのを待とうと諭す主人公の妻と息子との対話や、それに続く「ヘブライ語もアラビア語も、何語でも分かるさ。海は広くて繋がってるから、国境もないし、どんな魚でも受け入れる」というユダヤ人の子どもの対話の場面など (エミール・ハビービー『悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事』山本薫訳、作品社、2006年、147~158頁)。ただし、年を経るにつれてイスラエルとの和平に関する言動に拙速さや強引さが目立つようになったことが、晩年の彼の政治姿勢への批判につながったのかもしれない (たとえば Karīm Murūwa, “Imil Ḥabibi: Ma’sāt Sha’b wa-Waṭan fi Sirat wa-Adab wa-Fikr Shakhṣiyya Faddha”, *Mashārif*, 16 (1997), pp.90-91 を参照のこと)。

³⁶ “Exile Is So Strong Within Me, I May Bring It to the Land: A Landmark 1996 Interview with Mahmoud Darwish, Conducted by Helit Yeshurun”, *Journal of Palestinian Studies* 42 (2012), p.52; Muriel Leung, “Poetic Justice: Mahmoud Darwish’s Vision of Palestinian-Israeli Coexistence in the Holy Land”, *Al Noor* (Spring 2017), pp.12-21, https://docs.wixstatic.com/ugd/caee23_fe0e522f98bc4493bf520ecbf8ae2e87.pdf (Accessed 25 August 2018).